

聖秘 營氣第十六

〔五〕

黄帝曰く、血中に氣無ければ則ち固まり、其の氣をば即ち陽氣有り。

陽氣は穀氣自ら有り。故に營氣の道は穀を内れり實と爲す。

穀、胃に入れば乃ち之を脾に傳へ、中に流注し、外に布散す。

もよ (ひたひたをいふ事)

や

精の専らなるは經に隨に行り、常に營氣マレバもく無く、終らば始めに

復ふ是を天地の紀と謂ふ。

〔四〕

故に氣は太陽より出り、千の陽州に注ぎ、上に行き、下は足の陽州に

注ぎ、下に行き、上は踵上に至り、大指の間、に注ぎと 合す。

聖秘 十六 一

上行し、ま腕に抵り、肘より心口に注ぎ、千の少陰を循り、腋を出で、

を下り、

臂

小指に注ぎ、あ(さき)千の太陽と合す。上行し、腋を乘り

頰に出で、目の内眥に注ぎ、頰により、項を下り、足の太陽に合す。

脊を循り、尻を下り、下行し、小指の端に注ぎ、足心を循り、足の

少陰に注ぐ。上行し、臂に注ぎ、肘より心口外に注ぎ、胸中に散り

を出で、を下り、

心主の脈を循り、腋、臂、を出で、兩肘の間を出で、掌中に

入り、中指の端に出で、還り、小指の次指の端に注ぎ、千の少陽に

合す。上行し、膻中に注ぎ、三焦に散り、三焦より臍に注ぎ、脊を

足少陽に注ぎ下行と踵上に入り、踵より復つて大指間^に注ぎ、
足少陰に合す。上行して肝に注り、肝より上つて臍に注ぎ、上つて
喉嚨^を循り、頤頰^の竅^に入り、高門^に究み、其^の支別は額と
上つて巔^を循り、項中^を下つて脊^を循り、臑^に入る。是は督脈
也。陰囊^を絡^りて入り、毛中^を過^りて臍中^に入り、上つて腹裏^を
循り、臑^に入り、下つて臍中^に注ぎ、復つて太陰^に出ると此れ
腎氣^の行^る所^也也(世頤の常也)